

第 IV 部門

市街地の「路」に対する歩行者の評価

大阪工業大学工学部
大阪工業大学

学生員 ○梶田 祥之介
正会員 田中 一成

1. はじめに

近年、地方都市の過疎化が深刻となっている。過疎地域では、経済・社会の持続性の低下や移住・交流の停滞、観光客・住民の移動困難等の問題が起こっている。しかし、2020 年から見舞われている新型コロナウイルス感染症の影響により、地方移住の関心が高まっている。このような状況において、地方移住をした人が地方に定着するような空間づくりを提案していく必要がある。

2. 研究の目的と方法

人々にとって魅力があり住みやすく、また長い間住み続けたいと思う街を創造していくことは、地方過疎化を抑制する上での課題である。人々が定着したいと考える街を創出するためには、その街への「愛着」が必要である。「愛着」とは人が慣れ親しんだものに深く惹かれることであり、愛着を抱きやすい場所が多い街ほど定着しやすいのではないだろうか。本研究では街の中の「路（みち）」に着目した。着目した理由として、ケヴィン・リンチによると路は街の中でも「多くの人々にとってイメージの支配的な要素となっており、人々は移動しながらその都市を観察し、そのパスにそってそのほかの要素が配置され、関連付けられている」とされているためである。路に対して抱く愛着の一部を定量化することを目的とした。

研究方法として、人が路に対してどのような心理を抱いているのかを知るために SD 法による因子分析をおこなった。そして抽出された因子と関連すると考えられる項目を定め、それらについて一対比較法による経路選択実験をおこなった。実験により明らかとなった項目について分析し、定量化を試みた。

3. 因子分析による調査

9 枚の実際に存在する路の写真と 11 種類の評価尺度

を用いて、大阪工業大学に通う大学生 97 名を対象に SD 法による因子分析の調査をおこなった。取り出したそれぞれの因子が表 1 のようになり、それぞれの評価尺度の構成から、因子名を「機能性」、「情緒性」、「象徴性」とした。研究では、「象徴性」に着目し、人の愛着の中で機能や美観には関係しない部分の感情の定量化をおこなった。

表 1 得られた因子

	機能性	情緒性	象徴性
便利な	.738	.288	.200
広い	.705	.159	.195
静かな	-.481	.391	-.448
美しい	.002	.744	.214
爽やか	.155	.683	-.012
風情がある	-.464	.490	-.146
親しみやすい	.187	.416	.055
力強い	.169	.232	.727
濃い	.143	-.030	.600
都会的な	.568	.135	.570

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法^a

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

象徴性の数値が高い方を「独立的象徴性」、低い方を「関係的象徴性」と名付けた。これは象徴性の数値が高い路では街の要素が個々にシンボリックで象徴的であるのに対して、数値が低い道では要素が互いに関係しあって成り立っていると考えたからである。今回はこのうち関係的象徴性に着目し象徴性の定量化をおこなった。関係的象徴性が高い写真の共通点として、「人の数が少ない」「植栽がある」「日陰がある」「壁に凹凸がある」という 4 点が挙げられたため、これらの項目について調査した。

4. 経路選択による調査

前章の考察から分かった 4 つの項目について、一対比較法での経路選択実験をおこなった。この実験では各項目につき写真を 3 種類ずつ用意し、それぞれの写

真について対比関係となる写真を用意した。例えば人の数について、人が少なく関係の象徴性が高いと考えられる画像を3枚用意した。そしてその画像に対してPhotoshopにより人の数を増やし関係の象徴性が低いと考えられる対比関係となる写真を作り、計6枚の写真を用意した。結果は図1から図4のようになり、「人の数」は少ないほど好まれることと、「壁の凹凸の有無」は凹凸がある路の方が好まれることがわかった。

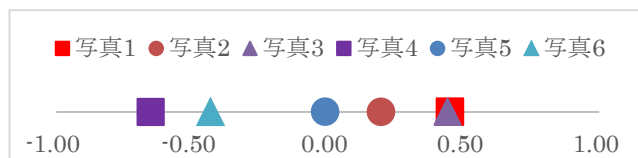


図1 人の数

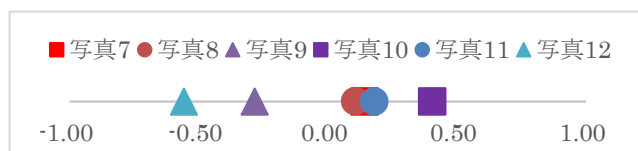


図2 植栽の有無



図3 日陰の有無

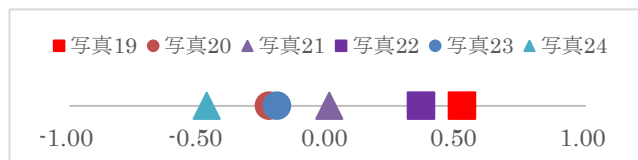


図4 壁の凹凸の有無

「人」の項目について、「写真に占める人の割合」が関係の象徴性と関係すると仮定し分析したが、尺度値による選択率と相関がなかった。このため、「近い空間」として捉えられる場所との相関を調べた。今回は、その場所を俯角により捉えた。樋口によると「俯角 10° 近傍の視線が水面にとどいているか否かによって、港や湖に対する視覚的な一体感が左右される」。このことから俯角 10° 以下の領域を「近い空間」として捉えられるのではないかと仮定し、「近い空間」に存在する人の割合と選択率との関係を調べた。結果は図1のようになり、「近い空間に占める人が存在しない割合」と「尺度値による選択率」には相関が見られた。俯角 10° 以

下に占める人の割合は関係の象徴性に関連すると考えられる。

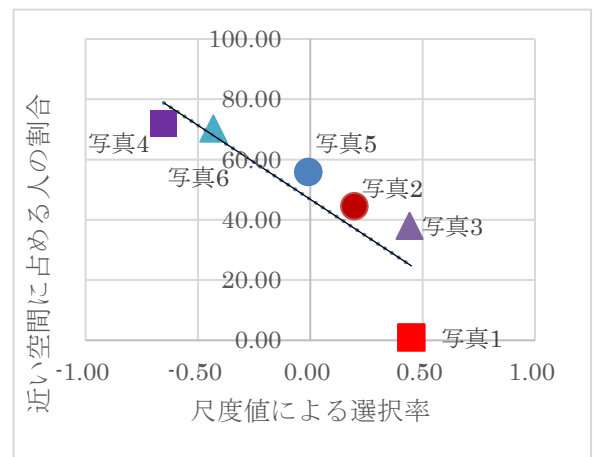


図1 人の割合と選択率

またこの結果より、「近い空間」における地面の単純さが関係の象徴性と関係するのではないかと考えた。次に「壁の凹凸」について、「近い空間の単純さ」より、俯角 10° 以上は相対的に複雑である方がよいのではないかと考えた。つまり地面に対し壁が複雑であれば、関係の象徴性が高くなると考えられた。

今後の研究として地面の単純さと壁の複雑さの2点に対する検証をおこなっていきたい。

5. おわりに

本研究では、人々が路に対して感じるイメージについて分析をおこない、路への愛着との関係を調べた。

「関係の象徴性」を定量化することによって人の数と壁の凹凸の有無についての感情を読み取ることができ、人の密集度が低い道や壁の凹凸が存在する道に対して人々は愛着を抱きやすい可能性をみいだした。課題として、一対比較法での調査写真や問いの言葉などの吟味や、壁の複雑さの定量化が挙げられる。

参考文献

- 1) 都市のイメージ, ケヴィン・リンチ, 丹下健三・富田玲子 訳, 岩波書店, p.56, 1968.9
- 2) 景観の構造, 樋口忠彦, 技報堂出版, p48, 1975.10